

第42回日本看護科学学会学術集会 2022

示説

演題番号 P21-1

## 日本の高齢者ケア技術移転時の課題 -インドネシア-

小笠原広実（公益財団法人 日本アジア医療看護育成会）

新美純子（公益社団法人 トレイディングケア）

野崎真奈美（順天堂大学 医療看護学部）

# 日本看護科学学会 COI 開示

筆頭者氏名 小笠原広実

所属名 公益財団法人 日本アジア医療看護育成会

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

## 【はじめに】

- 2017年より日本の技術移転を目的とした技能実習制度に介護分野が追加された。
- インドネシアでは、将来の高齢社会を見据えて高齢者ケア向上のための準備が進められている。

## 【研究目的】

日本の高齢者ケアについて、インドネシア人介護実習生の学びをとらえ、母国で活用できる技術・知識を移転するための教育課題を明らかにする。

## 【方法】

- ①日本の介護を1年以上経験したインドネシア人に、母国語による記述式調査を行い、日本語に翻訳し、日本で得た高齢者ケアの知識と技術の内容を類別する
- ②インドネシア保健省発令の「高齢者の健康についての国の政策」（2016）及び「ケアギバー教育のための研修プログラム」（2019）より、インドネシア政府が求める教育内容を明らかにする。
- ①②の比較から、今後の技術移転における課題を検討する。

【倫理上の配慮】 監理団体責任者の許可を得た上で、研究目的と協力は任意であることを口頭と文書（母国語）で説明し、口頭で同意を得た上で回答提出をもって同意とみなした。

【結果】 複数施設の6名から回答を得た。

## 1. 高齢者ケアについての意識

来日直後まで「高齢者はあらゆる機能が低下している」という見方

### 勤務する施設の高齢者の特徴

- ・ 認知症がある
- ・ 視力・聴力・抵抗力の低下

母国では、平均寿命が低く、日本のような高齢者はいない。家族と住んでいる。

4割:施設以外での健康な高齢者との交流がない

6割: **施設以外の高齢者**は、聴力、視力、記憶力が低下していない。考え方も正常、人の助けがなくても日常生活を送れている

認知症の人のケア; 全員が体験していて「ケアが難しい」と答えている

難しいのは、

- ①すぐに忘れるので同じことの繰り返し  
終わったのに、またトイレと言うなど
- ②急に怒りだした時の理解と対応
- ③帰宅願望や心配ごとへの対応

「指導者から教えてもらっている」  
その理解は・・・

認知症のケアとして

- 「我慢強く誠実に対応する」
- 「小さな子供のようにしていると対象を理解する」
- 「一人一人の性格をよく理解し嫌がることを避ける」
- 「事故のリスクを最小限にするための対応をする」

<外国人実習生の考える“自立” ”自立支援“とは>

- ①病気や障害を予防し健康を維持
- ②助けなしに物事を行う
- ③高齢者が自分で行動するのを見守る
- ④危険がないように注意しつつ、高齢者の望むように行動させる
- ⑤リハビリテーションを行う

<外国人実習生にとって高齢者ケアでうれしい体験>

- ①昔の話を聞かせてくれる
- ②日本語、方言、漢字を教えてくれる
- ③自分がいることを喜んでくれる

高齢者にとっては、  
\* 持てる力を発揮できる機会になる  
\* 教えることにより、自身の役割意識を持つことができるのでは

## 2. インドネシアが求める高齢者介護についての教育内容・考え方

### インドネシアの基本情報

- ▶ 高齢者とは、60歳以上  
割合は8.43%(2015)  
約2175万人/人口約2.6億人  
2035年予測は15.8%に増加
- ▶ 平均寿命(2015) 男性67.1歳  
女性71.2歳
- ▶ 健康寿命 男性60.7歳  
女性63.7歳
- ▶ 認知症を持つ人の割合(有病率) 統計なし  
高齢化の割合が高いジョグジャカルタ市の調査：高齢者の中で認知症は20%

### 日本の基本情報（参考）

- ▶ 高齢者とは、65歳以上  
26.8%(2015)  
29.1%(2021) 約3640万人
- ▶ 平均寿命（2020） 男性81.6歳  
女性87.7歳
- ▶ 健康寿命（2019） 男性72.68歳  
女性75.38歳
- ▶ 高齢者人口のうち、16.7%が認知症  
(602万人)  
2004年から「認知症」の呼称になった。

# 健康な高齢者とは？ 自立した高齢者とは？

## インドネシアの考え方（公的な文献より）

- ▶ 高齢者の健康度の向上のために、健康、自立、活動的、家族と社会にとって生産的で効率的な高齢者となれることを目指す
- ▶ ”質の高い生活を送れる”ことは、その人の希望に合わせ、できるだけ自由に自主的に社会参加でき、人間としての尊重と個人の必要性を満たすことである
- ▶ 保健所が、45歳以上のプレ高齢者の人にも、高齢者にも、健康増進と、予防、治療、リハビリテーションの視点で健康サービスを提供する
- ▶ 質の高い高齢者とは、健康で自主的、活動的で生産的な高齢者である
- ▶ 自立した高齢者とは、日常生活を自立して送る力のある人である。（自立 = mandiri）

## 日本（参考）

### 高齢者の自立の概念

- ▶ 身体的、日常生活の動作の自立だけではなく「意思決定」ができるかどうかを重要視している。
- ▶ 能力が衰えるのは当然なので、残された能力を使って、人間としての尊厳を保ち、生活していく。
- ▶ 機能が失われても、新しい生活を構築し自身でコントロールしていく



# 介護士の働く場所・介護士の質の担保

## インドネシアの状況

- ▶ 高齢者ケアギバーは、下記の施設で必要とされている。
- ▶ 公的なケアギバーと私的なケアギバーがいる。  
どちらも認定証が公式にはないので、スタンダードの教育研修が行われてこなかった。  
ガイドラインが必要なので、2019年にケアギバーの教育のガイドラインが法令として示された。
- ・ 養護老人ホーム 445か所
- ・ 高齢者のホームケア（自宅介護・住み込みあり）  
37州のうち、34州で実施されている
- ・ 病院 2776
- ・ 保健所 9852
- ・ 地域老人保健指導センター（Posyandu） 76547
- ・ 高齢者社会福祉施設 260
- ・ プライベートの老人ホーム 少数

## 日本（参考）

- ・ 老人介護福祉施設 8234か所
  - ・ 特別養護老人ホーム 7891
  - ・ 老人介護保健施設 4330
  - ・ 介護医療院 245
  - ・ 小規模多機能型居宅介護 5502
  - ・ 有料老人ホーム 1万3525
  - ・ 認知症グループホーム 1万2124
- (2019)

# ケアギバーへの研修

## インドネシアの研修内容

- ▶ 看護師がケアギバーの教育を行なっている。
- ▶ ADL自立度、IADL自立度、既往歴のチェック表、Hopkinsの言語学習テスト、うつ病スケール、GDS、趣味や活動のチェック表、記憶力テスト、状態観察のポイント
- ▶ 介護方法として、ADLの介助方法（口腔ケア、洗髪、爪切り、食事介助、健康状態や病気に応じた栄養、食事、コミュニケーション技術）

### <グループ討議に使う事例>

- 69歳から75歳くらいの事例
- 老人ホームで起こる問題より、家族と一緒に住んでいて、ケアギバーが住み込みで介護をするケース

- 例)
- 電話をしたいが視力が悪いので、いつも他の人に電話をかけてもらうように頼む老人
  - 高齢者は家の片づけをしたいと思っているが、家族が片づけをすることを許さない
  - 薬を自分で管理するように渡していいか

## 日本の介護福祉士教育（参考）

- ▶ 実務経験ルートと養成校ルートがある。

### <介護福祉士のカリキュラム>

- 人間と社会  
「人間の尊厳と自立」「社会の理解」  
社会保障の仕組みなど
- 介護  
介護技術・介護過程
- 心と体の仕組み  
発達と老化の理解  
認知症の理解  
障害の理解

\*人間をとらえる概念について多く学んでいる。

## 【考察①】 外国人介護士は、高齢者ケアについて何を学んでいるか

- 母国に比べて高齢者の年齢が高いことに驚き、認知症のケアを全員が体験し困難を抱えていた。
- 母国では施設入所は一般的ではないため、家族と離れて入所している高齢者とかかわるのは初めての体験である。
- 施設内の高齢者を見るだけでは、老年は機能低下するというイメージに変化が見られなかったものの、6割程度の方は、日常生活の中で、高齢でも元気な人と接する体験を持っていた。
- 認知症の人への関わりについて、“指導を受けた”と言うものの、認知症の人の見つめ方や、その人らしさを尊重する具体的な対応方法は教えられていないと思われた。技術移転をするには、現時点での知識、技術では不十分だと思われる。

## 【考察②】 ”自立した高齢者” ”自立支援”についてどのように理解しているか

- ▶外国人介護士は、“自立”を生活動作や身体的な機能の向上という狭義でとらえる傾向があった。
- ▶インドネシア保健省は、「”質の高い生活を送れる”ことは、その人の希望に合わせて、できるだけ自由に自主的に社会参加でき、人間としての尊重と個人の必要性を満たすことである」と示している。
- ▶日本の看護における”自立した高齢者“は、このような考えに重なるように思われる。「自立を目指す」という表現より、「QOLの向上を目指す」と表現すると伝わりやすいかもしれない。
- ▶高齢者が外国人介護士にいろいろなことを教えてくれる行動は、まさに高齢者のQOLの向上に役立っている。

### 【考察③】 インドネシアにおいては、どのような知識・技術が求められているのか

- ▶ インドネシアでは、日本の介護福祉士のような国家資格はないものの、ケアの質を担保するためにケアギバーの研修に力を入れているようになっている。
- ▶ 日本で介護の仕事を経験した人たちが、母国で指導的な役割を果たしていただくことが望まれる。指導をすることができるための知識・技術の習得が必要である。
- ▶ インドネシアでは、施設内でのケアよりも、ホームケア（訪問や住み込み）のニーズが高い現状である。
- ▶ 保健所や地域老人保健指導センターなどが数多く存在し、そこでは日本のデイケアのような健康をめざした活動が行われている。
- ▶ 日本におけるデイケアでのリハビリ、レクリエーションなどの指導の方法は母国で役に立つのではないかとと思われる。

## 【結論】

インドネシアにおける介護士教育の内容は、日本との共通性が大きかった。  
今後の技術移転における課題として以下があげられる

1. インドネシアでも高齢化が進むと認知症患者の増加が予想されるので、今後、認知症患者への対応方法は技術移転が必要な技術といえる。  
認知症のとらえ方や、具体的な対応方法を学ぶ必要がある。
2. “自立”を生活動作や身体的な機能の向上という狭義でとらえる傾向があった。  
意思決定を支え尊厳を保つ等、精神的、社会的な視点の理解を深める必要がある。
3. 高齢者が外国人介護士に日本語を教える等の行動は、持てる力を発揮しているといえる。  
その意味づけを理解することは、高齢者を尊重する意識につながると考える。
4. 高齢者の健康な生活を目指すために、日本のデイケアの活動や指導方法は今後のインドネシアに役立つと思われる。  
母国に戻った介護経験者が、指導的な役割を果たすことが期待される。